

---

# 任侠の鰐

零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

任侠の鰐

### 【Nコード】

N34990

### 【作者名】

零

### 【あらすじ】

前世の記憶を持つクロコ・D・アイルは、自身が前世で読んだ漫画『ONE PIECE』に登場するクロコダイルではないかという疑念を抱く。日に日にクロコダイルに近付いていく様に、自分は「良い人になる！」と誓い、任侠海賊を目指すという奮闘記。

クロコダイル元女説がありますが、この話で主人公は男になって

います。また原作とは離れていくかと思っています。

## 一・アイルという子（前書き）

最近ONE PIECEを一気読みして、ちょっと書いてみたいなあ  
あと思い投稿しました。少しでも楽しんでもらえたら嬉しいです。  
主人公クロコ・D・アイルを少し紹介する話になっています。よろ  
しくお願いします。

## 一・アイルという子

彼の名は『アイル』。クロコ・D・アイルである。

彼は現在5歳の、前世の記憶が残っている珍しい、しかし普通の人間である。前世の記憶があるため他よりほんの少し頭の良い、お得な感じで今の生を過ごして行くであろうお子様だ。

アイルは前世での自分の名前を思い出すことはできなかったが、自分がかつてそれなりに楽しく過ごしてきたことはわかった。両親がいて、友達がいて。実に幸せだったのだと思う。

鏡の前に立ったアイルは、子供ながらに立派な悪人面だった。それは彼自身の偏見があつてのこととも言えるが、ニヤリと笑えば客観的にも断言できるほどには悪人面である。特に手入れをしているわけでもないが髪は黒く艶やかで、目は鋭い。中々整った顔ではあるのだが…。

「何かクロコダイルっぽい…」

それは俺がクロコ・D・アイルだからだろうか、と彼は首を傾げる。もしかしたらここは記憶の中にあるONE PIECEの世界なのかと思つたが、他人の空似だと彼は思うことにした。

（そもそも俺があゝの超人達のいる世界で生き残れるわけがないじゃん）

鏡を見て溜息一つ。

とりあえず不測の事態に備えて体だけは鍛えようかなと思う今日の頃。

「アイルくん、ミホークが来ているよ」

アイルが滞在しているナナシ村の村長 ヤナメが彼を呼んでいる。彼は今ヤナメの家に居候させてもらっているのだ。

それは一週間前のこと。アイルが意識を取り戻した時、彼は一人の老婆に手を引かれて暗い森の中を歩いていた。何故彼がそんな場所を歩いていたのか、記憶になかった。ただその老婆は、時折「大丈夫です。大丈夫ですよ、アイル様」と彼に声をかけ、終始周りに気を配っていた。アイルを何かから遠ざけようとしていたのだ。暗い暗い森の中を必死に歩いて、そのまま森を抜けて、海岸につけてあった小船に乗り、そして小さな島へ着いた。そこには小さな集落があり、アイルは村長に預けられた。彼を連れてきた老婆は村長と少し話して、すぐに元いた場所に戻っていった。だからろくに説明を受けなかった彼はよく理解できぬまま、ここにいる。

ヤナメはアイルを受け入れ、家に置いている。村でも親切な人間だと評判のヤナメであるが、アイルは老婆とどういう繋がりがあるのかを気にしていた。

はい、と元気に返事をしたアイルは、唯一の遊び相手である近所の子供の顔を思い浮かべた。それは弱冠2歳にしてすでに肉食獣を思わせる子供であったが、所詮子供は子供。いくら鷹のような目をしてるからといっても彼の剣には敵わない。前世の彼は短い人生の大半剣道をやっていたからである。

（ミホークっていつてもまさかあの鷹の目のことじゃないでしょ。  
2歳だけど俺より弱いし）

彼の中で鷹の目のミホークは生まれて間もない赤子だろうと最強なのだと決まっている。残念なことにそれに対して良識的なツツコミをいれる者は誰ひとりいなかった。

「アイル！」

小さな手に手作りの木刀を握ったミホークは、目をギラつかせてアイルを見ていた。黒髪の間から見える猛禽類に似た特徴的な目をした幼児は、妙な威圧感をもっている。将来が心配だとアイルは思わざるを得ない。

「本当にミホークはアイルくんが気に入ったんだなあ」

にこにこと笑うヤナメは、アイルとミホークは本物の兄弟のようだと言った。それをアイルが何となく嬉しいと感じるのは、彼がこの世界での確固たる絆を持つていないからだろう。

わずか一週間で弟と可愛がる存在ができたのは、彼にとっても非常にありがたい事だった。

早く早くとせがむミホークの頭を、笑いながらアイルは撫でた。この村に來た翌日に、木刀で素振りをしている最中やって來た子供がミホークであった。ミホークは剣に興味を示し、教えてくれと以降アイルについて回っているのだ。アイルにしても無表情ではあるが小さな子供が自分を追いかけてくる様子を可愛いと思ったから、少し剣の基本を教えようと思ったのだ。

「行ってきまーす」

笑顔でヤナメに手をふり、二人は砂浜に向かった。



## 一・アイルという子（後書き）

年齢が近いということもあり、ミホークさんを登場させてみました。出身地がわからなかったので、村の名前はナナシ（＝名無し）村です。安易ですよ（笑）

クロコ・D・アイルの出生は、物語が進む中で出したいと思います。本人は記憶がないので特に気にしていませんが、子供にしては悪人面じゃないかと顔について真剣に悩んでいます。そして自分がいる世界が前世で読んだ漫画『ONE PIECE』の世界であると確信は持っていますが、自分はクロコダイルではないはずだ！と今は思っています。

## 二・打ち上げられた宝箱（前書き）

さっそくアイルが悪魔の実を食べます。一・からすでに三年経過しています。特に何事もなくのんびり修業の日々を送っていました。よろしくお願いします。

## 二・打ち上げられた宝箱

キン、と金属がぶつかり合う音が響いた。

「中々やるね」

決して押し負けることはないが、気を抜けば一本取られることはわかってる。クロコ・D・アイルはにこやかに笑いながらも力を抜くことはなかった。まだ年下のミホークに負けることはプライドが許さない。

「そういうアイルも」

ミホークは表情こそ変えることはなかったが、ぐつと足に力を込めた。裸足のまま砂浜で刀を交えているため、足をとられないよう気を使わなければならない。とはいっても、この模擬戦は千回を越えているため慣れたものだ。

彼等が手にしている刀　逆刃刀は、模擬戦のために村の刀鍛冶に造ってもらったものだ。

「アイル…何か流れてきている」

視線を海の方にやったミホークに、アイルもまた目を向けた。よくあんなに遠くの物を競り合いながら見付けたものだと感じる。

一度距離をとり刀を鞘におさめながら、波に揺られる小さめの木箱を目で追った。

「宝箱かな…？」

「あんなに小さな宝箱があるのか？」

「わかんない。ミホークとつてきてよ」

しかたがないと浅瀬まで流れてきているそれを取りに行く。アイルはその様子をぼんやり見て、ミホークも大きくなったなと思った。アイルは、ミホークが二歳の時から一緒にいるわけだが、日に日に成長していく様子を感じ、人間とはこうやって育っていくのだと親の心境を味わっている。ミホークの親が出稼ぎに行ったきり戻ってこなくなってから、もう三年が経った。その生死はいまだにはつきりしない。

その間、ミホークにとってアイルは親代わりであり、兄であり、友である。

「何だこの実は？」

箱を開け中身を取り出したミホークは首を傾げた。

手にのせた変わった模様の果実を、アイルに差し出す。

「……………もしや悪魔の実？」

似たような模様の実が記憶にあった。

「悪魔の実？」

ミホークはその実を知らない。閉鎖的な島では会話に上がることがないのだ。

「海の悪魔の化身って言われてて、食べたら一生カナヅチになるけ

ど特殊な能力が身につくっていう不思議な実なんだよ」

「特殊な能力？」

「食べてからの楽しみかな？俺はこれが何の実か知らないし」

ははと笑ったアイルに悪魔の実を押し付け、ミホークは食べてみると催促した。

「……一生力ナツチになるって俺やだよ。俺は刀と銃を極めるから食べなくていいし」

「愚問だな。銃はともかく最強の剣士になるのは俺だ。早く食べてみる。特殊能力が何か気になる」

（実験体か俺は……。まあこれがスナスナの実じゃなかったら俺はクロコダイルじゃないってわかるか。何にしても海に落ちなければ何とかなるよな……メリットの方が大きいはず……）

アイルはじいっと実を観察してから、緊張した面持ちでそれを口にした。口の中いっぱい苦みや渋さが広がった。

「マズッ！おえっ」

「そんなにマズいのか。それで、結局どうなんだ？」

ぼろりと手から落ちた実をそのままに、自身の手を見つめる。口の中にまだ味が残っていて、涙目になる。水か何かで味を変えてしまいたい、生憎手元に水分はない。

おえーっと舌を出せば、口からさらさら砂が落ちていく。口から砂

を吐くという漫画な表現を素でやってしまった。

「俺砂吐いた！？何で！？」

驚いたアイルは口を押さえ、慌てた。

「……まずは落ち着け」

静かなミホークの言葉に、アイルは深呼吸を繰り返した。落ち着け  
落ち着けと心の中で何度も唱え、冷静さを取り戻そうとする。

（人間が砂を吐くなんて絶対ないから！気のせいだ！）

ふう、と息をはき、もう一度手を見つめた。

さらさらと指先が砂になっていく。慌ててもう片方の手で指を押さ  
え、戻れ戻れと念じる。

「……まさかのまさかで…砂人間？やっぱり砂を吐ける砂人間？ま  
さかのまさかでやっぱりスナスナの実かよ？……ミホーク、ちよつ  
と俺を殴ってみて」

「？」

よくわからないままミホークがアイルに殴りかかった。しかしその  
拳はアイルに衝撃を与えることはなく、体を通り抜けた。その部分  
は細かい砂となり、宙を舞った。

「砂？」

「やっぱりそう見えるかな…」

「ああ。砂に見える」

「やっぱり砂なのか…」

アイルは号泣した。やはり自分はそのクロコダイルになるのかと。

「泣くほど嬉しいか？」

ミホークは、良かったなと無表情でアイルの肩を叩いた。

「違いますう…俺の未来を悲観してるとこなんですー」

「その能力も極めれば使い物になるのだろ？悲観する必要はない」

そこではたと気付く。スナスナの実は悪魔の実の中でも強力なロギア系であることに違いはないのだと。やり方によっては使えるのではないかと。

（……確かに正論だ。じゃあ俺はこの力を使って、良い人になればいいんだ）

前世の記憶にあるONE PIECEの登場人物であるクロコダイル。生粋の悪人を全力でいく（演じる？）クロコダイルに、アイルは良い印象がない。自分は善良な一市民だと思っている彼は、誰にも嫌われたくないしボコされたくもない。

ぐっと拳を握って、アイルは声高らかに宣言した。

「任侠海賊に俺はなる！」

それがアイルが考えた悪人化しないための道だ。海軍に入りたいとは思わない。正義を背負うにも、正義の定義が曖昧で背負う気にはならない。ただの一市民のままでいるのは何だか勿体ない気がする。海に出て世界を見てみたいと考えていたのは事実であるから、海賊の中でもピースメインの海賊になって困っている人を助ける海賊になろうと思ったのだ。海には海賊が多く、多少の武装しなければ對抗できない。世界中を巡るには海賊となった方が便利だろうと考えた。冒険家だと資金提供の後ろ盾が必要であり、自由さを重視するならば海賊の方が良いだろう。その分全ての責任を負わなければならないが、そこはしかたがない。

「任侠？つまりはピースメインの海賊になるのか……。アイルが海賊になりたいとは知らなかった」

「だって今決めたもん。ミホークも一緒に来る？世界中を回って剣士と勝負すれば？」

ミホークは少し考えて、それもいいなと呟いた。いずれにせよこの村からでなければ、剣士の頂点には立てない。どのような形で海に出ることになろうとも、ミホークは目標に近付けるのであれば構わないと思っている。このアイルと共に行くのも面白そうだと小さく笑った。

クロコ・D・アイル8歳。スナスナの実を食べて自身が原作のクロコダイルだという確信が高まり、任侠海賊になることを誓う記念すべき年となった。



## 二・打ち上げられた宝箱（後書き）

砂人間って口から砂がはけそうですよね…。クロコダイルの顔（もちろん幼いですが）でそれをやっていたら面白いです。

それにしても全く表情の変わらないミホークって、子供らしくない（笑）どちらかというと性格的にはアイルが弟のようだと思います。きっとミホークは常に核心についてアイルを焦らせるはず。成長していくにつれ、ミホークは苦勞人になっていきそうです…。

### 三・ロジャーという男（前書き）

二・で悪魔の实の話をしましたが、一口目はまずくないのだと教えていただきました。申し訳ありません…。

さて、今回はせっかく生きているのでゴール・D・ロジャーを登場させてみました。今後何話かは想像によるロジャーさん達と話を進めることにしようかと考えています。

### 三・ロジャーという男

それはアイルが航海術の勉強をしている時のこと。村中から借りてきた本を積み上げて、片っ端から読んでいると。

「アイルも外に出ろ！海賊だぞ！」

近所の住民がヤナメの家の縁側にいたアイルに声をかけた。アイルは顔を上げ、首を傾げる。まだ海賊の数は少なく、その海賊がナナシ村へ訪れる理由も特にならない。ナナシ村はとても小さく、上陸する海賊など今までいなかった。

「ヤナメさんも行ったの？」

「ああ。俺は先に行くからな」

急いで駆けていく隣人を見送り、アイルは読み掛けのページに棹を挟んで立ち上がる。腰に逆刃刀を佩き、唯一ナナシ村まで来る時に持っていた拳銃を右のピストルホルダーに突っ込む。村を襲うような海賊である場合、彼自身戦うつもりであった。

どんな海賊なのだろうと考えながら、アイルは人が集まっている海岸に向けて走り出した。

すぐに人だかりを見付け、その先頭にいるミホークに気付き前に出る。

目の前には一人の男が悠然と立っていて、村長であるヤナメに対しにこやかに話をしていた。

「…あの海賊はしばらくこの島を拠点にしたいらしい」

一瞬アイルに目を遣りミホークは口を開いた。そうなのかと呟いたアイルは、何故栄えているわけでもないこの小さな島をあえて拠点にするのかと疑問を持った。海賊がまだ少ないとはいえ、多くの者はより神秘を、富を、強敵を求めるのだと彼は思っている。それに欠けるナナシ村は、何もないからこそあまり目立たずに行動できるとも言えるのだが…。

「俺はゴール・D・ロジャー。上陸の許可がもらえれば、仲間にくしぶりの土を踏ませてやりたい」

船長 ロジャーはそう言い、不安の色を隠せないナナシの村人に両手をあげてみせた。

（もしかしくなくても後の海賊王？…後で話聞かなきゃ）

アイルが危険性はないだろうと構えていると、ロジャーは突如豪快に笑い出した。

「どうかしましたか？」

ヤナメは不審そうにロジャーを見る。争う意思はないのだと言っために手をあげたと思ったら、次は爆笑しだしたのだ。村人達は顔を見合わせ、困惑しながら答えを待つ。彼等も直接海賊に会うのは数える程しかなかったし、どのように対応すればよいものかと悩んでいた。

「いやあ…すまん。つい」

笑つのを堪えながら謝罪したロジャーは、大きく息をついてから真顔でアイルを見た。

「悪人面ではあるなと思ったんだが…今の笑い方は更に凶悪だな。将来が楽しみだ」

ぽんぽんとアイルの頭を撫でたロジャーは再び笑い出した。

一方アイルはあまりのショックに地面に手をついて、やはりそう見えるのかと自身の顔を呪った。少し笑ったつもりだったのに、そんなに凶悪そうに見えるとは…。初対面の相手に言われたとなると、純粹に外見だけのイメージで悪人っぽい、と思われることになる。第一印象は重要だ。…アイルはもう少し爽やかな人になりたいと心から願った。

「アイル…落ち込むな」

ミホークは片膝をつき、アイルに語りかける。

「慰めてくれるのか友よ…」

涙ながらにミホークを見れば、彼は小さく首を横に振り、アイルに更なる衝撃を与えた。

「凶悪なのは元々わかっていたことだ。今更落ち込んでも意味がない」

「……………」

陰を背負い込んだアイルを励ましたのは、村人達であった。

「ミホーク、そう言ってやるな。顔は置いといて、アイルは良い子だろ」

「そうよー弄りがいがあって面白いでしょ？ショックを受けない範囲でにしないと泣いちゃうじゃない。もう泣いてるけど」

「皆わかってるぞ。アイルは悪い奴じゃないって。あんまり気にするな」

それぞれがアイルに声をかけるが、面白がっているのが大半で、フオローをしているのはごく僅か。

「ちくしょー…人事だと思って…」

泣きながら言うアイルを生暖かい目で見つめながら、口々に頑張れよと言う村人に、アイルは深い溜息をついた。

「刀にも銃にも顔は関係ない。気にすることはない」

「あー…うん。ありがとーミホークくん。君はもつと表情筋を使ったらどうだい？」

「俺の分までアイルが使っているからいい」

ミホーク自身、感情表現が苦手なことは理解している。喜怒哀楽といった感情を表に出すことはほとんどないが、それを特に気にしたことはない。

そうですか、と呟いてアイルはいまだに笑っているロジャーを見た。目の前で繰り広げられた会話を聞きながらアイルを観察していたロジャーは、本当はそこまで悪人面ではないが、これはからかいがある子供だと笑っていた。

「……ヤナメさん、別に悪い人ではなさそうだから受け入れてあげてもいいんじゃないですか？」

もとよりロジャーの海賊団の危険性は低いと思っていたアイルはそう意見を述べた。ヤナメも彼の独特な雰囲気悪くないものと思っていたため、頷く。

「……問題はなさそうだね。上陸を許可しますよ、船長さん」

アイルは村の中で信頼が厚い。前世の記憶を頼りに武器を改良し、耕作を見直し、村の子供達を集めて学校のまね事をしている。特に学び屋のないナナシ村ではアイルによる青空教室は高い評価をされていて、子供ではあるがアイルは大人から絶大な支持をされていた。ヤナメもその中の一人で、彼もそう考えるなら心配はないだろうと承諾したのだ。

ただその顔と性格のギャップから、よく弄られるのだが…。

「そうか。それは嬉しい。早速仲間に知らせてくる」

ロジャーは礼を言い、笑顔を浮かべたまま一度船に引き返していった。

アイルにはロジャーが何を探しているのかはわからない。ただ彼が危険な人間ではないだろうとは思えた。それはロジャーの目が穏やかだったからそう思ったのかもしれない。

### 三・ロジャーという男（後書き）

そういえばナナシ村がどこに位置するのか書いていませんでしたね。いつたいどこにあるんだろう…。

海賊になると宣言はしたけれど、本物を見たことがないとなるとちよっとつまらないですね。

ロジャーさんはいつ頃空島に行ったのでしょうか…大丈夫そうならその話も入れたいなあと思います（笑）



#### 四・船ネコイヌ（前書き）

一ヶ月ぶりでしょうか…。更新が遅くてすみません。あと、応援してくださった方！ありがとうございます！！

さて今回は海賊船にてアイルとミホークはよくわからない動物に遭遇する、という次回へ向けての話になります。よろしく願いします。

#### 四・船ネコイヌ

気の良い海賊もいるものだと、ナナシの村人は思った。

酒を飲み交わしながら、海賊達は信じられないような冒険話を語り、世界はどれだけ広いのかを感じたまま話した。ほとんどがこの島周辺しか知らない村人は、面白い話を肴に酒を飲んだ。陽気な歌を口ずさみ、リズムを刻む楽器の音を耳に、夜は更に深くなっていく。

ユラユラ揺れる焚火の炎はあたたかく、子供達はいつもなら早々に眠るのだが珍しく起きていた。

「子供は寝る時間だ」

ロジャーは酒を煽り、自分の周りにいる子供達に言った。不満そうな顔に、まだ暫く滞在するのだからいつでも話はできるだろうと解散を促した。

「アイルだったか…お前さんはいいのか？」

ロジャーの隣で、副船長であるシルバース・レイリーがアイルに問い掛けた。自分のことを子供扱いしてくれたことに少しの感動を覚え、それからアイルは小さく苦笑する。村では大人と同じ扱いを受ける彼は、まだ子供であつたなと当たり前のことを思った。

「じゃあ俺もそろそろ戻りますね」

立ち上がり、おやすみなさいを口にする。それを引き留めるようにロジャーは「ああ」と思い出したように言った。

「明日、少し海へ出る予定なんだが…お前も来るか？」

ロジャーの誘いにアイルは驚きながらも大きく頷いた。まさかロジャーが知り合ったばかりの自分を海に連れていってくれようとするとは夢にも思わなかったのだ。しかしろくに海へ出たことがないアイルは、心から喜んだ。海賊になると言っただものの、実際に海賊が何をやっているのか見たことはない。一緒に海に出る海賊がかの有名人なゴール・D・ロジャーの一味とはかなり豪華である。日頃は全く信じていない神というものにお礼を言いたいと思うほど、アイルのテンションは急浮上していた。

「昼頃に俺達の船に来い。お前の相棒も連れてな」

相棒とはミホークのことであるとすぐにわかった。ミホークもまた海賊になると言っているため、海をちゃんと知るにはいい機会だとアイルは元気に返事をした。

翌日。

「……アイル、寝不足か？」

ミホークは相変わらず無表情のまま首を傾げた。とはいえ鋭い鷹のような目はどこことなく心配そうに見え、アイルは大丈夫だと首を振る。

（興奮して寝れなかったなんて恥ずかしくて言えないなあ…）

まるで遠足の前日に眠れない子供のようだと、そつと苦笑したアイルは、約束している場所　海賊船の停留している付近の砂浜を目指した。

陽気な海賊達は歌をうたいながら出航の準備に取り掛かっていた。その中の何人かがアイルとミホークに気付き、手を振った。

「来たかボウズ共！」

「お前らの初航海は見る、晴天だぞ」

「ロジャーなら船人中だ。そこから行けばいいからな」

口々に声をかけられ、二人は律儀にあいさつを返ししながら甲板に足をついた。船員達にすでに話は通してあるようだ。よろしく願います、と心の中で呟いた。

子供の目線では全てが大きく見え、この大きな船をどうやって動かすのだろうと、興味津々だった。紙の上ではない、本物の知識が必要となる。一定の大きさを超えない小さな船しか保有していないナシ村では見ることのなかったものが多くあり、これはどう使っているのかと聞きたくてしかたがない。

海の風が通り過ぎた。

悠然と波を見ていたロジャーが顔を上げ、船首の側で振り返る。

「更に…悪人面になってる」

「……ひどいです、ロジャーさん……」

肩を落とし、アイルはこめかみを押さえて呟いた。にやにやと面白いものを見つけた子供のように笑う男は、ププツとわざとらしい声を漏らす。

（なんて…大人げのない人なんだ…）

「アイルは楽しみなことがあると寝れ……」

「うわぁっ！余計な事は言わなくていいから！」

他人の秘密を暴露しないでくれとミホークの口を手で押さえれば、何のつもりだ？と射抜くような目で見られる。

「意外とお子様なんだな」

「…ほつといて下さい」

アイルは深い溜息をつき、下を見た。ちょうどそこには取り外しが出来そうな目を凝らさなければわからないくらい薄く線が浮き上がっている場所があり、気になった彼はミホークから手を離ししやがみこんでコンコンと叩いてみた。

「何かあるのか？」

アイルの横から同じように覗き込むミホークは、首を傾げながら鞘の先で突いたみる。

「それは触らない方が良かったのに……」

ポソリと呟いたロジャーは喉の奥で笑い、そして食料を運び込んでいたレイリーに声をかける。

「レイリー、下がった方がいいぞ」

「?…ああ」

子供達に憐れみの目をくれてやり、彼は少し離れて二人を見守ることにした。

一方アイルとミホークは、板を外してみようと思ったのだがこじ開けようとしても中々開かないため、ただ線が入っているだけで何も意味はないのだろうと考えた。

「あ」

突如ロジャーが声を上げたため、アイルとミホークはそちらへ顔を向ける。

「どうかし…まっ!？」

どうかしましたか、と尋ねようとした言葉は勢いよく開けられた板で顔を強打したことにより最後まで紡がれることはなかった。

「……………」

「……………大丈夫かアイル」

ミホークは直撃を免れたため、顔の潰れた板は砂に変わったアイルの顔にめり込んでいるように見える。アイルに戸惑いを覚えつつ

声をかけた。

「……………ロジャーさん、そんなにヒーヒー笑わなくても…。つか先に教えてくれてもいいじゃないすか」

ミホークに向けて一言大丈夫だと伝え、アイルは酸素不足になりながらも手を叩いて大爆笑中であるロジャーをジロリと睨む。レイリ―はやれやれと肩を竦め、砂を元に戻すアイルの向こう、つまり外れた板の下から頭を覗かせている生き物を見た。三角の耳がピクピクと動いている、黒色の猫のようなもの。それから先に荷物を運んでしまうかとそつと背を向けた。

「……………猫なのに猫じゃない…………？」

よく見れば胴体のちょうど真ん中で頭に向かつて黒色、尻尾に向かつて灰色にわかれている。黒色の部分については猫だが、下半身はまるで犬のようで猫のしなやかさがなく、尻尾はふさふさしていた。

「何ダコノヤロ。ヤンノカ？」

小型犬ほどのサイズのそれが可愛らしく小首を傾げながら、抑揚なく言った。

「しゃべったな」

興味深そうに猫の顎を指で撫でてやるミホークに対して、「何ダコノヤロ。」と呟きながらも目を細めてごろごろと喉を鳴らしているのは、それが猫だからだろうか。

「これ、何ですか？」

「何ト八何ダコノヤロ。」

その鋭い爪がアイルの砂の体を掻いた。

（凶暴な猫…？いや、犬…？）

「何ダコノヤロ。」

ガリガリと引つ掻くのは砂で、アイルには何の痛手もない。氣にくわないのか、それは諦める事なく攻撃をしかけている。

「絶滅寸前のネコイヌだ。見たことないか？」

ネコイヌ…見たままだなとアイルは冷静にその生き物を眺めてみた。おそらくまだ子供なのだろう、幼さが残っている。

「知能が高い上にリバーシブルなんだ」

「…リバーシブル？」

おかしな単語が聞こえたので聞き返してみる。生き物にリバーシブルとかあるのか？と一瞬真面目に考えたが、まさかそんなことはないだろうと思った。

ロジャーはネコイヌに近付き、その背中に手を伸ばした。

ジジジジ…

（いやいや有り得ない音がするんだけど）



背中の毛に埋もれたチャック。ロジャーがジッパーを下げていくと、黒猫と灰犬の皮が 脱げた。

「!？」

「動物にはチャックがあるのか。初めて知った」

「違いますよミホークさん！そんなことはないと思いますよ!？」

「現にチャックはある」

「……確かにあるけど……」

あらわれたのは金色の猫。ロジャーは手に持っているネコイヌの皮を、ネコイヌの口元へやり それをバクリと丸呑みした猫は、ゲフとゲップをして尻尾を揺らした。

「……食べましたね、自分の毛皮……」

「ネコイヌは脱いだ毛皮を食べてまた着るんだ。きかたは企業秘密らしいから俺も知らないけどな」

「へえ……飼っているんですか？」

「ポッキーは船ネコイヌだ」

「……？あ、そうなんですか」

ポッキーとはこのネコイヌの名前らしい。

（船ネコイ又って…家猫みたいなものかな？とりあえず住み着いている感じなのかな…）

アイルがポツキーを観察していると、ポツキーはミホークの足元に擦り寄り、ぐるりと彼の周りを一周した。その姿は普通の猫のようである。

「何ダ殺スゾ。」

フーツと威嚇しながらポツキーはアイルを睨みつけた。

「……………え？」

「アイル、嫌われてるのか？」

ミホークは不思議そうに首を傾げる。

「俺何かしたかな？」

「やっぱり…………」

アイルの顔を見てロジャーはにやりと笑う。

「いい奴かどうかコイツにはすぐにわかるんだろうな」

そしてポツキーに手を伸ばした。

「俺、中身は悪人じゃな…………」

「何ダコノヤロ。」

アイルの言葉を遮って、ポツキーが鋭い爪でロジャーの手を引っ掻きながら言った。イテ…と手を引っ込めた彼は口を尖らせる。

「……ロジャーさんも嫌われてるんですね」

「違う、偶然だ。虫の居所が悪かったただけだ」

「はいはい」

「ポツキーほらおいでー」

ロジャーが宝石をちらつかせてポツキーを呼べば、フラフラと近付いていく。ポツキーは光り物が好きだった。

（うわー…変な猫だなホント…）

アイルの隣で無表情にポツキーを目で追っているミホークは、何を考えているのかわからない（実際何も考えていない）。いったい何をしにきたのだろうと疑問を感じてきたのだが、それに終止符を打てる人間がちょうど戻ってきた。付き合いきれず荷物を置きにいったレイリーである。アイルもミホークもいつ彼がいなくなっただのか全く気がつかなかった。流石と言うべきか、彼等がまだまだ未熟だと言うべきか。

「ロジャー…いつまで遊んでいるつもりだ？ポツキーを連れて行くんだろ？」

「あー、わかってる」

頭を掻いたロジャーは、海に目をやり風に目を細める。そして小さく「そうか」と零し、振り返った。

「30分後に船を出す」

「伝えてくる」

ロジャーの指示にレイリーは頷き、他の船員の方へ行った。

ポツキーはフンと鼻を鳴らし、元いた板の下へ入り器用に蓋をしめる。最初から何もなかったようだ。

きっとロジャーがレイリーに下がるよういったのはポツキーが板を弾き飛ばすためぶつからないように注意を促したのだろうなと何となく納得してみた。仲間を大切にするロジャーがはじめてかっこいいと思えたなんて本人には言えないなとアイルは思う。

船長らしい顔つきになったロジャーを、アイルとミホークはじっと見つめ、これから始まる冒険に胸を踊らせるのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3499o/>

---

任侠の鰐

2010年11月20日00時54分発行